

平成 28 年度大学院派遣教員に係る実践報告書

土佐町立土佐町中学校 教諭 濱本智子

1 研究の成果と課題をふまえた平成 29 年度の実践報告書

(1) 大学院における研究の成果と課題

昨年度は、「ユニバーサルデザインに基づく授業づくり」-1st ステージおよび 2nd ステージを考慮して-を研究テーマとして、1st ステージとしては、全ての子どもに効果的な指導を実施し、2nd ステージとしては、補足的な指導を包括した授業構成する。また、個別指導計画が反映される指導方法や手立ての授業実践についても検討した。

研究内容としては、第一に全ての授業観察、SDQ アンケート実施、学力検査、授業チェックリスト等を使用してアセスメントを行い実態把握をした。第二に授業づくりにおける 1st ステージ支援と 2nd ステージ支援を考慮しつつ生徒同士を「つなぐ支援」や褒める言葉や肯定的評価に着目して実践を行った。第三に SDQ の結果や学力検査結果から実践の検証を行った。成果と課題では、関わり合いをユニバーサルデザインとして追求していくことで、具体化される教師の一方的な「教え」ではなく、自ら「学ぶ」共に「学び合う」という学習スタイルこそ、子どもが主体的に能動的に学習する学びへとつながり、その際に関わり合いが重要な視点となった。その結果、SDQ アンケートでは「情緒面」の項目において有意差が見られ、「総合困難」が下がった結果となった。課題としては、特別支援教育を理解することが重要であり、個々の実態を十分に把握し、実態に即した個別の課題や目標を立てること、具体的な指導内容を提示しているツールとしてある「個別の指導計画」に沿って、学校生活のあらゆる場面において、指導と支援の一貫性の教育を行うなど、今後はユニバーサルデザインと学校組織・体制づくりという観点の推進が課題でもあると考える。

(2) 平成 29 年度の実践内容

本年度は、初任者研修指導教員（拠点校指導教員）として 3 中学校を訪問し実践を行った。また、特別支援教育コーディネーターとして小中連携を図り実践を行った。

①初任者拠点校指導教員としての実践

高知県授業づくり Basic ガイドブックを活用し目指す授業づくりとして、発達障害をはじめ様々な困難のある子ども達の特性を理解させた上で、ユニバーサルデザインに基づく「分かる・できる授業」における工夫や大切にしたいポイント（Ⅰ環境の工夫 Ⅱ情報伝達の工夫 Ⅲ活動内容の工夫 Ⅳ教材・教具の工夫 Ⅴ評価の工夫）について、具体的な実践を提示し特性を考慮した支援方法についても指導を行った。夏期研修では「ユニバーサルデザインによる学校シンポジウム」を、初任者研修（一般研修）として位置づけをした。

②小中特別支援教育コーディネーターとの連携

小学校の特別支援教育コーディネーターと校内支援体制ガイドブックを活用し、校内支援委員会の活性化を図った。校内支援委員会を定期的（年間 7 回）に行う年間計画を作成し、支援方法を協議し本人の困り感を共有した。また、個別指導計画での支援方法をより良いものにするために、支援方法を追記し児童生徒の変容を小中全教職員で確認を行った。

③特別支援教育の視点（ユニバーサルデザイン教育）校内研修会の実施

高知大学教育学部 人文社会科学 特別支援教育コース講師の鈴木恵太先生を招聘し、発達障害の理解と有効な支援方法の学習会を実施した。学級担任や授業での困り感を全教職員で共有し、学級や個に応じた支援方法をグループで考え 2 学期からの実践につなげた。

④学校通信を毎月発行（名称：かがやき通信）

全家庭に、特別支援教育の視点でユニバーサルデザイン教育での支援方法を発信した。通信には「相談窓口」を設定し SC との連携を図る手立てを行った。

⑤ユニバーサルデザイン教育の取組み発信

特別支援教育の視点から、ユニバーサルデザインに基づく授業づくりのポイント（Ⅰ環境の工夫 Ⅱ情報伝達の工夫 Ⅲ活動内容の工夫 Ⅳ教材・教具の工夫 Ⅴ評価の工夫）でのよいモデルを全教員に発信をした。小中学校の先生方の取り組みや工夫点等を共有し学校全体の意識化を図った。

2 平成 29 年度の実践の成果と課題

平成 28 年度の研究からの課題としては、教職員が多様な特性のある子どもに主体的・対話的で深い学びを行うためには、まず教職員が特別支援教育を理解することが重要であると考えた。個々の実態を十分に把握した上で、実態に即した個別の課題や目標を立てることを目的として「個別の指導計画」に沿って学校生活のあらゆる場面において指導と支援の一貫性のある教育が重要であると考察した。平成 29 年度の実践における成果としては、初任者指導教員として「高知県授業づくり Basic ガイドブック」や若年教員研修のしおり「こどもと生きる」を活用して、ユニバーサルデザインに基づく授業づくりの工夫点や配慮について指導を行った。発達障害をはじめ様々な困難のある子ども達の特性を踏まえて、すべての子ども達が「分かる」「できる」授業をめざし初任者の先生方が意欲的に授業づくりと生徒とのコミュニケーションを図りながら実践ができたことが大きな成果であった。

また、特別教育支援教育のコーディネーターとして、小中で連携を図りより効果的な実践につなげることができるように、教職員の校内研修で学びから特性を理解しより具体的な支援方法を発信することでユニバーサルデザイン教育の充実につながったと考えられる。学校通信を発行することにより、特別支援教育の理解とユニバーサルデザインの理解や応用行動分析を、特別支援教育に生かす工夫や実践を発信でき家庭でもできる支援方法を提示することで学校教育だけではなく保護者との連携につながるための一助となったと考えられる。

今後の課題としては、特別支援教育とユニバーサルデザイン教育を今後も推進していくためには、継続的な取り組みを実践していくことが大切であると考えます。校内支援体制を充実させていくためには、色々な視点から情報を収集し必要な支援を学校全体で共有し実践することができる仕組みをつくるのが、これからの特別支援教育コーディネーターの役割であると考えます。

《参考文献》

- 1) 高知県教育委員会（2013）すべての子どもが「分かる」「できる」授業づくりガイドブック
～ユニバーサルデザインに基づく、発達障害の子どもだけでなく、すべての子どもにあると有効な支援～
- 2) 高知県教育委員会（2015）すべての子どもが「分かる」「できる」授業づくりガイドブック
～ユニバーサルデザインに基づく、発達障害の子どもだけでなく、すべての子どもにあると有効な支援～
実践事例 Vol.1
- 3) 高知県教育委員会（2016）高知県授業づくり Basic ガイドブック
- 4) 高知県教育委員会（2017）高知県授業づくり Basic ガイドブック 平成 29 年度改訂版
- 5) 高知県教育委員会（2017）すべての子どもが輝く校内支援体制づくりガイドブック
～特別支援教育の視点でのチーム学校をめざして～